

算命学中庸

【初年】 24 回目

24 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【二十四節気七十二候】

【初年】 24 回目 【二十四節気七十二候】 01

にじゅうしせつきしちじゅうにこう こよみ
二十四節気七十二候は暦のことです。

中国では、古くからつかわれていた暦です。

1 年を 12 ヶ月に分けます。

これが十二支のもとになっているのです。

1 年 12 ヶ月 (十二支)



2 つに分けます

1年12ヶ月を2つに分けました



さらに2つずつにわけると。

つまり、ひと月（一ヶ月）を前半と後半に分割したのです。

（子月＝ひと月）（丑月＝ひと月）（寅月＝ひと月）という十二支の（ひと月）を、子月であれば（前半の子月）と（後半の子月）というように、一つの月を（前半）（後半）に分けたのです。

二十四節気はおよそ15日ごと

二十四節気はおよそ15日ごと

正月節〔立春〕

正月中〔雨水〕

二月節〔啓蟄〕

二月中〔春分〕

そうしますと、1年を24に分けられることとなります。

これが24節気です。「節季」は「節」ともいい、その季節を表す。

一年の各月を2つに分けた



24節気

にじゅうしせっき

一ヶ月を二つに分けたので、一つの節気は15日位です。

（ひと月の30日を二つに分けましたので、一つの節気が15日位）

その15日の節気が、1年のなかに24あるわけなんです。

1年間を24に分けました。そして➡

☞ 「節季せつき」を「節せつ」ともいい、その季節を表します。

にじゅうしせつき
二十四節季は、「節せつ」と「中ちゅう」が交互に繰り返されます。

春は〔立春〕から始まり、〔立春・啓蟄・清明〕が「節」です。

そのあとにある〔雨水・春分・穀雨〕が「中」です。

ます。夏は〔立夏〕から始まり、秋は〔立秋〕から始まります。

	節	中	節	中	節	中
春 ⇒	〔01 立春〕	〔02 雨水〕	〔03 啓蟄〕	〔04 春分〕	〔05 清明〕	〔06 穀雨〕
夏 ⇒	〔07 立夏〕	〔08 小満〕	〔09 芒種〕	〔10 夏至〕	〔11 小暑〕	〔12 大暑〕
秋 ⇒	〔13 立秋〕	〔14 処暑〕	〔15 白露〕	〔16 秋分〕	〔17 寒露〕	〔18 霜降〕
冬 ⇒	〔19 立冬〕	〔20 小雪〕	〔21 大雪〕	〔22 冬至〕	〔23 小寒〕	〔24 大寒〕

二十四節気

節と中が交互に並びます

正月節〔立春〕	正月中〔雨水〕	二月節〔啓蟄〕	二月中〔春分〕
三月節〔清明〕	三月中〔穀雨〕	四月節〔立夏〕	四月中〔小満〕
五月節〔芒種〕	五月中〔夏至〕	六月節〔小暑〕	六月中〔大暑〕
七月節〔立秋〕	七月中〔処暑〕	八月節〔白露〕	八月中〔秋分〕
九月節〔寒露〕	九月中〔霜降〕	十月節〔立冬〕	十月中〔小雪〕
十一月節〔大雪〕	十一月中〔冬至〕		
十二月節〔小寒〕	十二月中〔大寒〕		

〔たとえば〕〔処暑〕は「中 = 中気」です。『月』を決めるものであり、〔処暑〕が含まれる月は、旧暦の『七月』を意味します。

二十四節気のように、1年を二十四の節に分けました。

その一つの節を、さらに細かく【3つ】に分けました。

〔立春〕であれば

- 一候（立春・初候）2/4～2/8 頃
- 二候（立春・次候）2/9～2/13 頃
- 三候（立春・末候）2/14～2/18 頃

〔雨水〕であれば

- 四候（雨水・初候）2/19～2/23 頃
- 五候（雨水・次候）2/24～2/28 頃
- 六候（雨水・末候）3/1～3/4 頃

〔啓蟄〕であれば

- 七候（啓蟄・初候）3/5～3/9 頃
- 八候（啓蟄・次候）3/10～3/14 頃
- 九候（啓蟄・末候）3/15～3/19 頃

〔春分〕であれば

- 十候（春分・初候）3/20～3/24 頃
- 十一候（春分・次候）3/25～3/29 頃
- 十二候（春分・末候）3/30～4/3 頃



七十二候 しちじゅうにこう

そうしますと、最終的に1年は72に分けられることになります。それが 七十二候 (しちじゅうにこう) です。

1年12ヶ月の時期に分けたら、1つの月が約30日です。

30日を2つずつに分けた。24節気の一つが15日位。

その15日間を、さらに3つに分けたから5日。

最終的に1年を5日毎に区分しました。

1年間を細かく72の区分に分類して、季節の移り変わりをこまかく丹念たんねんに観察して、自然界の変化の過程から、さまざまな自然の法則を学び取り、暦こよみに取り入れたのです。

☞ 「二十四節気七十二候」は、直接、占いに用いるものではありません。

七十二候を直接、占いに用いるものではないのですが、

〔たとえば〕春になると、どういう現象が起きるのか、季節が夏へと移行して、夏が来る前に、まずはこういうことが起こって、それから夏が巡って来るとか――。

冬が来る場合も、雪が降る前には、必ずこういう現象が起きるとか、そういう自然の移り変わりを詳しく観察して、それを占いの観方に応用したのです。

ここでは「二十四節気七十二候」があるということ、にじゅうしせっきしちじゅうにこう知っておいて頂ければよろしいです。

⇒ 現在私たちが用いている「^{たいようれき}太陽暦〔新暦〕」1872年（明5年）に採用された暦です。

それ以前に用いられていた^{こよみ}暦は『^{たいいんたいようれき}太陰太陽暦』といいまして、月の欠けを主な基準とした^{こよみ}暦（旧暦）です。

⇒ 旧正月は『^{たいいんたいようれき}太陰太陽暦』つまり旧暦の1月1日のことです。

「立春」は〔旧暦の1月1日〕ではないのです。

「立春」は二十四節気で決められた日付「新暦の2月4日ごろ」を「新年の春の始まり」とするのです。

⇒ 1年は「立春」から始まります。

現代のカレンダーでいえば、「立春は2/4から2/5頃」です。

2020年2月4日は「二十四節気」の正月節・立春です。

二十四節気はおよそ15日ごと

二十四節気はおよそ15日ごと

正月節〔立春〕 正月中〔雨水〕 二月節〔啓蟄〕 二月中〔春分〕

〔立春〕は「二十四節気」の一番目に来る^{せつき}節気です。

⇒ **七十二候** について :

🔍 参照 ⇒ ^{しちじゅうにこう}七十二候 【二十四節気七十二候】 04

「二十四節気」の『節』を3つに分けて ⇒ 24 節 × 3 候 = 72 候

^{いっこう}一候 (初候) ・ ^{しょこう}二候 ・ ^{にこう}三候 — ^{さんこう}七十二候 ^{しちじゅうにこう}といます。

一候 (立春・初候) 2/4 から 2/8 頃

一候 (初候) ⇒ 東風解凍 (こちこおりをとく) 東の春風が氷を溶かし始める

毎年、立春の時期になると、東から風が吹いて来ました。

それまではほとんど北風が吹いていたのに、立春にはいると、

ようやく東から風が吹くようになる。

実際にそういう現象が起きました。

ただし、この二十四節気七十二候というのは、中国での話なので、

日本の自然の移り変わりと比べれば、少しずれている部分がある

かも知れませんね。

二候 (立春・次候) 2/9 ~ 2/13 頃

二候 ⇒ 黄鶯睨睨 (うぐいすなく) 鶯が山里で鳴き始める

立春から 5 日位経つと、二候に入るわけです。

二候の時期になると、山中の鶯が鳴き始める時期になったという

ことです。

三候（立春・末候）2/14～2/18頃

三候 ⇒ 魚上氷（うおこおりをいずる）割れた氷のあいだから魚が飛び出る

三候の時期になってくると、氷の近くに魚が上がってくる。

それまでは川も湖も凍っていて、魚が見えなかったのに、氷が薄くなってきて魚が見えるようになる。

……というふうに、1年間を最終的には5日毎に分けて、自然の移り変わりを観察して暦こよみにしたわけです。

⇒ 「二十四節気」—— 説明を加えます。

正月節〔立春^{りっしゅん}〕「春が始まる」2/4頃1年が始まります。

春

春という字は、このように書きますけど、この春の上の部分は、土のなかから、植物が芽を出そうとしている姿を文字にした象形文字だそうです。

三 ⇒ 大地を表わしています。

日 ⇒ 太陽を表わしています。

春になると太陽が暖かくなり始め、土のなかから植物が芽を出そうとしますよ。その姿が春という文字ということです。

正月中〔雨水^{うすい}〕2/18~19頃から

雨水は〔あまみず〕と書きます。雨が降り始める時期です。

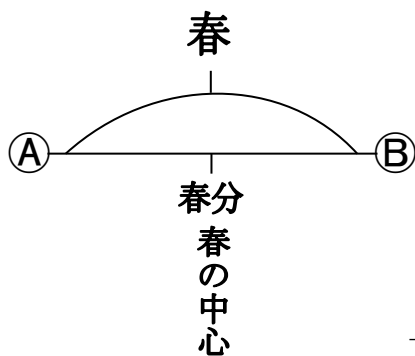
それまでは雪ばかり降っていたのに、2月の18/19日位になると雨が降り始めます。それで雨水という名称になったそうです。

二月節〔啓蟄 けいちつ〕3/5~6頃から

啓蟄の啓は「閉ざしているものをあけひろげる」という意味があり、蟄は「かくれる・もぐる」つまり、もぐっていたものが地上に出てくるという意味です。土のなかで冬眠していた動物が目覚めて、地上に出てきますよ。ということです。

二月中〔春分 しゅんぶん〕3/20~21頃から

春分というのは「ここは春の中心」という意味です。



春分の日は、

昼の長さとお夜の長さがおなじです。

太陽の力が1年で最も平均しています。

それで、春の中心として「春分」と名付けたわけです。

春は立春から始まって3ヶ月位あるわけですが、

春という季節がAからBまでであるとすれば、その中心、春のちょうど真ん中に春分がきます。

春分の日が来るように、暦は設定されているわけですが、春のど真ん中なので「春を前半と後半とに分ける日」と、いう意味で春分と名付けられました。

三月節〔清明 せいめい〕 4/4~5 頃から

清明は〔清い・明るい〕と書きますが、草木の花が咲き始め天恍
4/5 頃になると、晴れて明るい陽気となってきますよ。

三月中〔穀雨 こくう〕 4/20~21 頃から

穀雨は〔穀物の雨〕と書きます。これもその通りで、作物を育て
るのに必要な春の雨が降る時期という意味です。

四月節〔立夏 りっか〕 5/5~6 頃から

この年はじめて、太陽が照りつけ、草木が生い茂る暑い季節を感
じる時期の意味です。

草木が生い茂る暑い季節

四月中〔小満 しょうまん〕 5/21~22 頃から

小さな満足という意味があります。春に蒔いた種に芽が出始め、
一定の大きさに育ってきます。収穫はまだまだ先ですが、何とか
実りまでいけそうだ——という小さな満足感の意味で名付けら
れたそうです。大きな満足まではいかないけど、収穫の見通しが
ついたということです。

五月節〔芒種 ぼうしゅ〕 6/5~6頃から

芒種は、稲や麦の穂先にある硬い^{かた}とげのような毛をもつ^{こくもつ}穀物の種
という意味です。つまり、麦や稲を植える時期の意味です。

日本では、特に芒種は梅雨入りの時期に当たります。

五月中〔夏至 しげし〕 6/21~22頃から

夏至については前にも出てきました。夏至は「夏が中心に至る」
という意味で、夏至（夏が至る）と名付けられたので、夏が至ると
書きます。1年のなかで、昼が最も長い日です。

中国の昔の書物に「淮南子 ^{えなんじ}」という思想書があります。

淮南子は書物の名前です。

そのなかに、夏至と冬至についての記述があります。

夏至⇒乗陽「極陽」陰気によって万物は死滅へ向かう

冬至⇒乗陰「極陰」容器を仰いで万物は生生へ向かう。

要点を書きますと――

夏の日至ればすなわち陰は陽に乗る

冬の日至ればすなわち陽は陰に乗る

夏至には陽気極まって陰気萌（きざ）し

冬至には陰気極まって陽気萌（きざ）す

☞ 算命学は、これらを一言で表しますと、つぎのような考え方になります。

「陽極まれば陰となる」

「陰極まれば陽となる」

一言でいえば、陰極まれば陽となる。

「夏の日至ればすなわち陽は陰にのる」

つまり、陰が乗っかって来るといっています。

「夏至には、陽気極まって陰気萌し」 どういう意味かといえ、夏至は1年のなかで昼が一番長い日です。

でも、1年で昼が一番長い日ということは、もうそれ以上は長くないということです。それゆえに、逆に——夏至の日から、日が縮み始めることになります。

太陽、陽の気が衰え始めると、陰の気が始まりますよ。

夏至は、一見、昼が1番長くて陽の気が極めて強いように見えるけど、1番昼が長いということは、もうそれ以上に、昼は長くなりませんので、夏至からは日が縮み始めます。

夏至が来ると、陰気が出始めますよ。という意味合いです。

夏至と反対に—— 冬至は昼が一番短い日です。

冬で寒いし、陰の気が強いけれども、1年で一番昼が短いということは、もう、それ以上は短くなりません。

ですから、冬至から日が伸び始めるわけです。

つまり、陽気が出始めます。ということです。

1番寒くて、1番太陽のチカラが弱い、1番昼が短い、その冬至が来たら、もうそれ以上に弱くならない、寒くならないわけですから、そこから陽の気が始まりますよ。そういう意味です。

算命学では、これを一言で「陰極まれば陽となる」と、いいます。この考え方は運勢を観るときに用います。

運勢は、すごく順調に昇っていく時期がありますが、頂点に達したら、後は下り坂というふうに見ます。

「この^{あたり}辺が、この人の運勢の頂点だな」そういう観方が出来るようになっていきます。

山に登って頂上まで来たら、あとは下りるしかないわけです。

谷底まで落ちれば、あとは昇るしかありません。

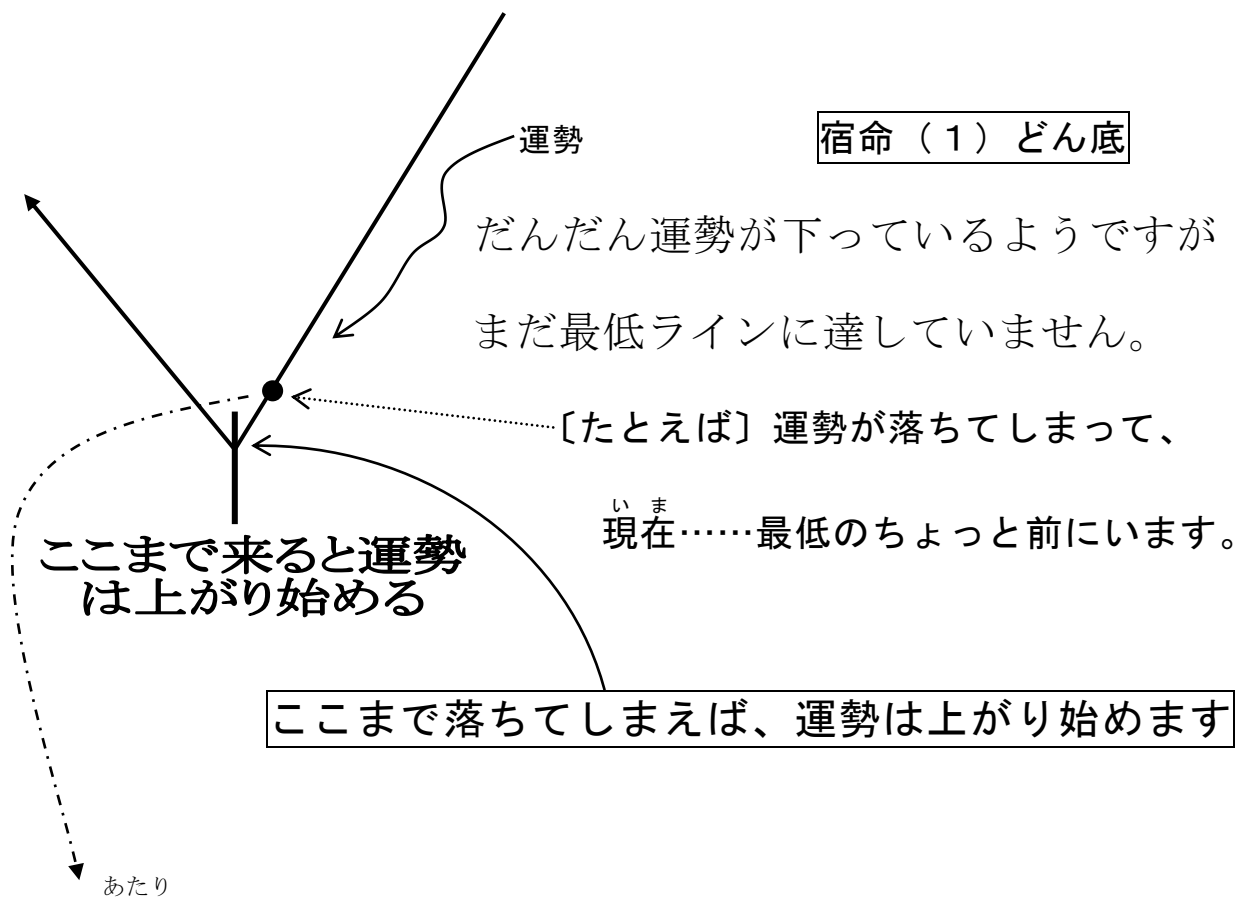
「この人は現在が^{いま}絶頂期だな——」絶頂期だとすれば、もうそれ以上は伸びません。ということになります。後は下り坂です。

運勢はそういう仕組みになっていると考えているのです。

それゆえに、運が落ち込むときも、最低まで落ち込んだら、もうそれ以上は落ち込みません。

どん底まで落ち込んだら、後は、逆に、運勢が回復し始めます。

⇒ 日本国のどん底は、東日本大震災が相当するわけです。



この辺にいるとき (どん底に落ちる少し前) ……人はふつう
どのように対処しますか？

[たとえば] 商売が落ちてきちゃって、現在はこの辺にいるとか、
あるいは、健康でも大分体調が悪くなってしまって、ここまで落
ちて来たとか、夫婦仲が大分悪くなってきちゃっているとかの

場合……普通どうしますか??

この^{あたり}辺にいるとき……なんとかこれ以上に落ちないように、努力することが多くないですか、いかがですか。

この辺にいる場合に、これ以上落ちないように頑張ってしまうと、いつまでたっても運勢は回復しません。

すべてとは言い切れませんが、占いのうえでも——

現在、この^{あたり}辺にいるときは、いっそ“どん底まで落ちてしまいなさい”ここまで落としちゃえば、後は、上がり始めます。回復しますよ。

そういう答えが出ることがあります。

宿命(1)どん底のように、普通の思考としては——ここまで悪くなっちゃったから [もうこれ以下に落ちたら大変だ] として踏みとどまろうとします。

あそこで踏みとどまると、いつまでたっても上がり始めないので。

こういう状況のときは、いっそのこと、底辺まで落ちたほうが、あとは、すんなり上がって行ける、ということによくあります。

・病気のとき、いっそ病気で倒れたほうが、その後に、完全に回復することがあります。

具合が悪いのに、無理して一所懸命に薬を飲んで、何とか体をごまかして、これ以上悪くならないように、悪くならないように、踏みとどまろうとすると、いつまでたっても、その病気は治らないのです。

いっそ病気で倒れちゃって、ちゃんと入院して、完全に治療したほうが、本当に健康を取り戻せますよ。そういうことはあるはずです。

・夫婦の場合、大分夫婦仲が悪くなってきたとします。夫婦仲が悪くて、うちはもう離婚寸前だということで、もうこれ以上悪くならないように、お互いに気を遣ってなんとか夫婦仲を維持しようとする、いつまでたっても回復しないのです。

いっそのこと大喧嘩しちゃえば、“雨降って地固まる”の譬^{たと}えのように、かえって仲直りできることがあります。

・親子でも、兄弟でも、そういうことはよくあります。親子の仲がまずくなってきた、まずくなってきたから、

お互いに気をつかって、これ以上悪くならないようにと踏みとどまろうとすればするほど、いつまでたっても、仲直りできません。

いっそのこと、思いっきり仲を壊しちゃう、そのほうが大喧嘩しちゃったほうが、それをきっかけに、お互い、仲直りできる、あるいは、立ち直れる。そういうことはあるのです。

そういうときには、**宿命（1）どん底**のように、谷底へ落ちてしまうことを、占いのうえで勧めたりもします。

☞ しかし——ご夫婦の場合なら、お二方の宿命を加えて判断しますよ。

お子さんがいる場合はお子さんの宿命も加えます。

親が離婚しても、動じないお子さんもいます。親が離婚しては困るお子さんもいます。さまざまです。

ただ、「陰極まれば陽となる」「陽極まれば陰となる」ということでいえば、陰極まれば陽になるわけですから、陰に極まらないで、陰の手前〔どん底まで落ちない手前〕に

〔たとえば〕「チャゲ&アスカ」のアスカさんの場合は、妻の洋子さんが警察に内通したと報道されていますが、彼は結果的に底辺まで落ちたわけです。

アスカさんは逮捕された機会に、覚醒剤を止めないと、完全な中毒になってしまいます。

彼の演奏パフォーマンスと音楽は、人体図の水火の激突ですが、運勢的に頂点は過ぎています。

関係者の支援で、たとえ復帰できたとしても、以前のようにはならないわけです。

妻の洋子さんは、芯の強い女性ですけど自己中です。

アスカさんが覚醒剤に走るには、それなりの理由があるわけです。

鬼谷子の「原因なくして、結果はない」ということです。

六月節〔小暑 しょうしょ〕 7/7~8 頃から

小暑は、小さい・暑い、と書きますが、ここは梅雨が明けて、暑さの厳しい時期になります。

六月中〔大暑 たいしょ〕 7/22~23 頃から

大いに暑い、と書きますように、ここは1年で最も暑さの厳しい時期です。7/22 位から始まるわけです。

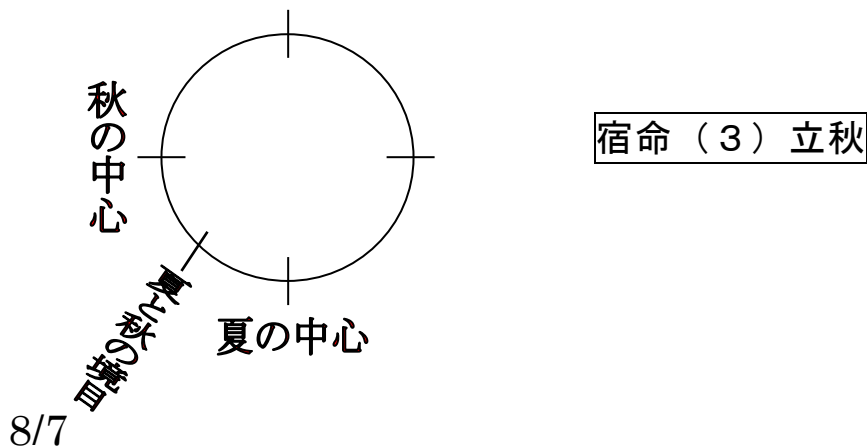
現在でも、この時期に暑中見舞いを出したりしますけど、大暑を過ぎると、七月節〔立秋〕になります。

七月節〔立秋 りっしゅう〕 8/7~8 頃から

立秋に入ると、秋の気配を感じるようになってきます。

「秋の始まり」という意味です。

この日付の決め方としては、図に描いてみます。



【初年】 7 回目【十二支の成立】 のところでやりましたように、

「夏至は夏の中心」で「秋分の日は秋の中心」であったわけです。

夏至は太陽が最強になるところなので、そこを夏の中心に定めたわけです。夏至は、昼が一番長い日です。

ところが『秋分の日は、昼と夜の長さがおなじ』です。

それゆえに、太陽のチカラがちょうど 1 年で平均している日だと、いうことで、ここを秋の中心と決めました。

夏の中心と、秋の中心から見て、ちょうど度真ん中にぶつかる所が、夏と秋の境目だとしたわけです。

夏至から数えて、あるいは秋分から数えて——ちょうど

真ん中に来る所が『夏と秋の境目』です。

これは、日付でやっていくと、だいたい **8/7** です。

8/7 は立秋で、秋はここから始まります。と、日付を定めたわけです。

毎年、夏至が何日になるのか、秋分の日が何日になるのか、これは閏年がきたり、太陽暦の日付でいくと、年によっては1日位ずれることがあります。ゆえに立秋の日も1日位ずれて来ることがあるわけです。

ここにもう一つの考え方が入ってしまして、大暑は 7/23 から始まる〔15日間位の期間〕をさします。

これは最も暑い日です。立秋は 8/7 から始まります。

実際この当たりの時期というのは、1年のなかで一番暑い時期でしょう。

それなのに——なぜ、ここで〔立秋〕というのかです。

先ほどの太陽を観測した日付とは別に、大暑のところが最も暑くて、その最も暑い時期を過ぎると、今度は涼しくなり始めるわけです。

最も暑いということは、もうそれ以上暑くなりませんよ。

ということでもあります。

最も暑い時期を過ぎたのだから〔立秋からは、涼しくなり始めます〕という意味合いで、ここを〔立秋〕というふうにしたわけです。

このような考え方も含まれています。

お天気予報などで、「今日は8/7で立秋です。暦の上では今日から秋ですけど、まだまだ暑さの厳しい日が続いています」とか、「今日は立秋ですけど、真夏日になりました」とか……アナウンサーがいたりします。

つまり、〔立秋〕は、涼しいから秋ということではないのです。

「立秋から、涼しくなり始めるので、秋なのです」という考え方をしているわけです。

言い換えれば、一番暑いから立秋ということですよ。

一番暑いということは、それ以上は暑くならないということですから、陽極まって陰となる涼しさが出始めるわけです。

立秋からどんどん涼しくなって来るのです。

そういう意味が〔立秋〕には含まれています。

そして、秋という字はこのように書きますけど、「禾のぎ」のよこに「火ひ」と書きます。

ノギヘンは作物を意味します。



禾 ⇒ 作物（主として、稲などの穀物です）

火 ⇒ 太陽（太陽をさしています）

秋は作物が太陽を浴びて熟します。実ります。

作物が熟す ゆえに「秋は実りの秋」といわれています。

昔から、秋というのはこのような時期ですよ。といっているわけです。

ようやく作物が、太陽の光を浴びて熟します。ということから、秋という文字が生れたそうです。

七月中〔処暑 しょしょ〕8/23~24頃から

処暑というのは字の通りで、暑さがとどまる時期という意味です。

秋になったけど、まだ暑さが峠に留まっています。

その暑さも、ここから峠を越えて行きます。

八月節〔白露 はくろ・しらつゆ〕 9/7~8頃から

白露も字のごとくで、白い露（つゆ）が降り始める時期という意味です。

9/8頃になると、大気も冷えてきて、ようやく露が見られ始めるわけです。

八月中〔秋分 しゅうぶん〕 9/23~24頃から

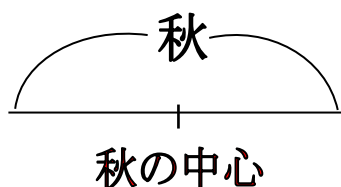
秋分は秋の中心です。と記しましたように、秋の中心です。

秋分 ⇒ 秋の中心

秋は3ヶ月位ありますが、ちょうど真ん中のところが秋分です。

秋を分けるという意味で、〔春分〕とおなじです。

秋の真ん中なので、秋を前半と後半とに二分している、分けている日です。ということで、秋分と名付けられました。



秋分は、もともと〔秋の中心〕という意味なのです。

九月節〔寒露 かんろ〕 10/8~9 頃から

寒露も字のとおりで、露(つゆ)が冷たくなる時期です。

10/8頃になってくると、露も冷えて、寒くなってきます。という意味です。

九月中〔霜降 そうこう〕 10/23~24 頃から

霜降は霜が降り始めるという意味です。

露(つゆ)ではなくて、霜(しも)となって降り始める頃です。

十月節〔立冬 りっとう〕 11/7~8 から

立冬 ⇒ ここから冬が始まります。

冬

冬という字の上の部分は、作物を吊しておく姿を意味しているそうです。

秋に刈り入れをした穀物を、冬の間はぶら下げておくのでしょう。

十月中〔小雪 しょうせつ〕 11/22~23 頃から

小さな雪です。雪がちらちらと舞い始めるという意味です。

十一月節〔大雪 だいせつ〕 12/7~8 頃から

大きな雪、雪が激しく降ってくるという意味です。

十一月中〔冬至 とうじ〕 12/21~22 頃から

冬至は冬の中心「冬が頂点に至る日」です。

1年中で昼が1番短い日で、夜が最も長い日です。

日照時間が1番短く、日差しも弱い、太陽のチカラが1年で最弱になる場所です。

それゆえに、ここを冬の中心と決めました。

冬という季節は、太陽のチカラが弱くなり、寒くなって冬になるわけですから、冬の中心だといえます。

立秋のところとおなじ考え方です。

太陽のチカラが最弱になるということは、もうそれより弱くなりません。ということですから、逆に——冬至からは、太陽が強くなり始めるわけです。



ここから太陽のチカラは強くなり始める

それゆえに、陽の気「陽気」が生まれるところである。

と考えています。

自然界において、冬至のところはまだまだ寒いのですが、実質ここで陽の気が生まれています。

ここから「陽気」が生まれるということで、冬至は毎年、子月にあります。

それで、十二支の1番始めは（子）になっているのです。

「万物の気はここから動き始めますよ」ということで、十二支の最初が（子）となったわけです。

十二月節〔小寒 しょうかん〕 1/5~6 頃から

小寒はいわゆる寒の入りです。

小寒 ⇒ 寒の入り

とても寒くなってきました。

本格的な冬に到来です。

十二月中〔大寒 だいかん〕 1/20~21 頃から

最も寒いが厳しい時期に入ります。

この厳しい寒さが過ぎると、また〔立春〕がめぐってきます。

最も寒い時期を過ぎると、立春にもどって春のはじまり

です。暖かくなり始めるわけです。

「陰極まれば陽」となります。

「二十四節気」はここまでです。

自然界の1年のなかに、春夏秋冬の移ろう姿があります。

その変化の様相ようそうを参考にして、「運勢の法則」のようなものが形成されていったのです。

その元になったひとつが「二十四節気」でもあるのです。

⇒ 「二十四節気七十二候」を直接占いにつかうわけではないのですが、自然の摂理から運勢のうごきを学んだわけです。自然界の移ろいが、占いの考え方に取り入れられているのです。

〔たとえば〕冬至は子月の位置にあります。冬至を境に、冬至の日から「陽気」が生まれます。そうしますと、宿命を見たときに、子月に生まれた人でも〔冬至より前の日にちに生まれた人〕と〔冬至の後の日にちに生まれた人〕では、陽気を浴びたのか、陽気を浴びていないのかで、運勢に違いがでてきます。

「二十四節気」の移ろう姿は、占いをするうえで、基になっているひとつであると、おもって頂ければよろしいです。

【初年】 24回目授業【二十四節気七十二候】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 25回目【自然と生活】